

イドゥートのマスタバにおけるレリーフの復元と再解釈

肥後尚** 安室喜弘*** 吹田 浩****

Reconstruction and Reinterpretation of the Relief in Mastaba Idout

Tokihisa HIGO** Yoshihiro YASUMURO*** Hiorshi SUITA****

1 はじめに

エジプトのサッカー遺跡にあるイドゥートのマスタバでは、関西大学のミッションが地下埋葬室の壁画の保存修復のための研究を進めている。このプロジェクトは、2003年度から「日本・エジプト合同マスタバ・イドゥート調査ミッション」として活動を始めた。その成果を受けて2008年度に関西大学にて「文化財保存修復研究拠点」(Institute for Conservation and Restoration of Cultural Properties, ICP)を設立し、2013年度からは「国際文化財・文化研究センター」(Center for the Global Study of Cultural Heritage and Culture, CHC)として活動を継続している。エジプトの文化遺産を主な対象として、国際レベルでの文化財の保存や修復、活用などを目的に、多様な分野の専門家によって総合的な文化財科学の研究を進めている¹⁾。

本節では、CHCにおけるイドゥートのマスタバの歴史的・文化的価値を評価する研究の一つとして、地上部分のレリーフの復元と再解釈の研究成果を報告する²⁾。本研究では、レリーフの復元にあたって、エジプト学の視点に基づく考察と併せて、三次元測量のデータを活用することで、レリーフのより精密な復元を行った。また、先行研究では論じられなかった点にも注目し、同時代資料を手がかりに、レリーフの欠落部分の復元的解釈を試みた。なお、マスタバ内部の各室の番号については、資料によって異

なるため、本稿では、カナワティとアブデルラズィークによる報告書 [Kanawati and Abder-Raziq 2003] の記述にならない、本研究の対象とする地上部分のレリーフを「第3室西壁」(Room III, West Wall)と称する (Fig.1)。

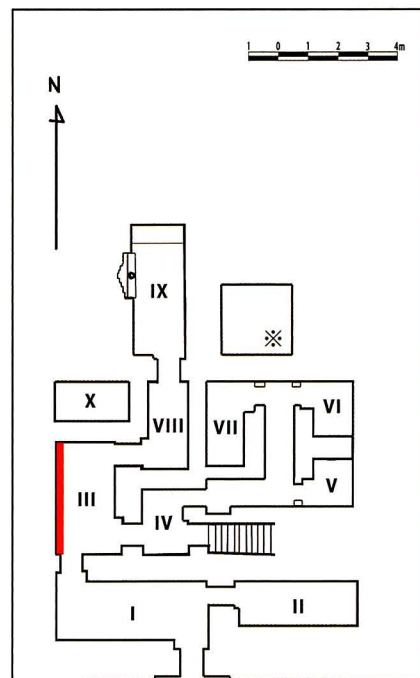


Fig. 1 イドゥートのマスタバの地上部分の見取り図「第3室西壁」(Room III, West Wall)を赤色で示す。また、*で示した箇所は地下埋葬室への入口となるシャフトを示す (Kanawati and Abder-Raziq 2003: Pl. 49を参考に作成)。

1) プロジェクトの詳細については本報告書序章を参照。

2) CHC以前のイドゥートのマスタバに関するエジプト学研究については、杉 2005; 吹田、吹田 2012を参照。

* 関西大学国際文化財・文化研究センター (Center for the Global Study of Cultural Heritage and Culture, Kansai University, Japan)

** 関西大学大学院文学研究科 (Graduate School of Letters, Kansai University, Japan)

*** 関西大学環境都市工学部 (Faculty of Environmental and Urban Engineering, Kansai University, Japan)

**** 関西大学文学部 (Faculty of Letters, Kansai University, Japan)

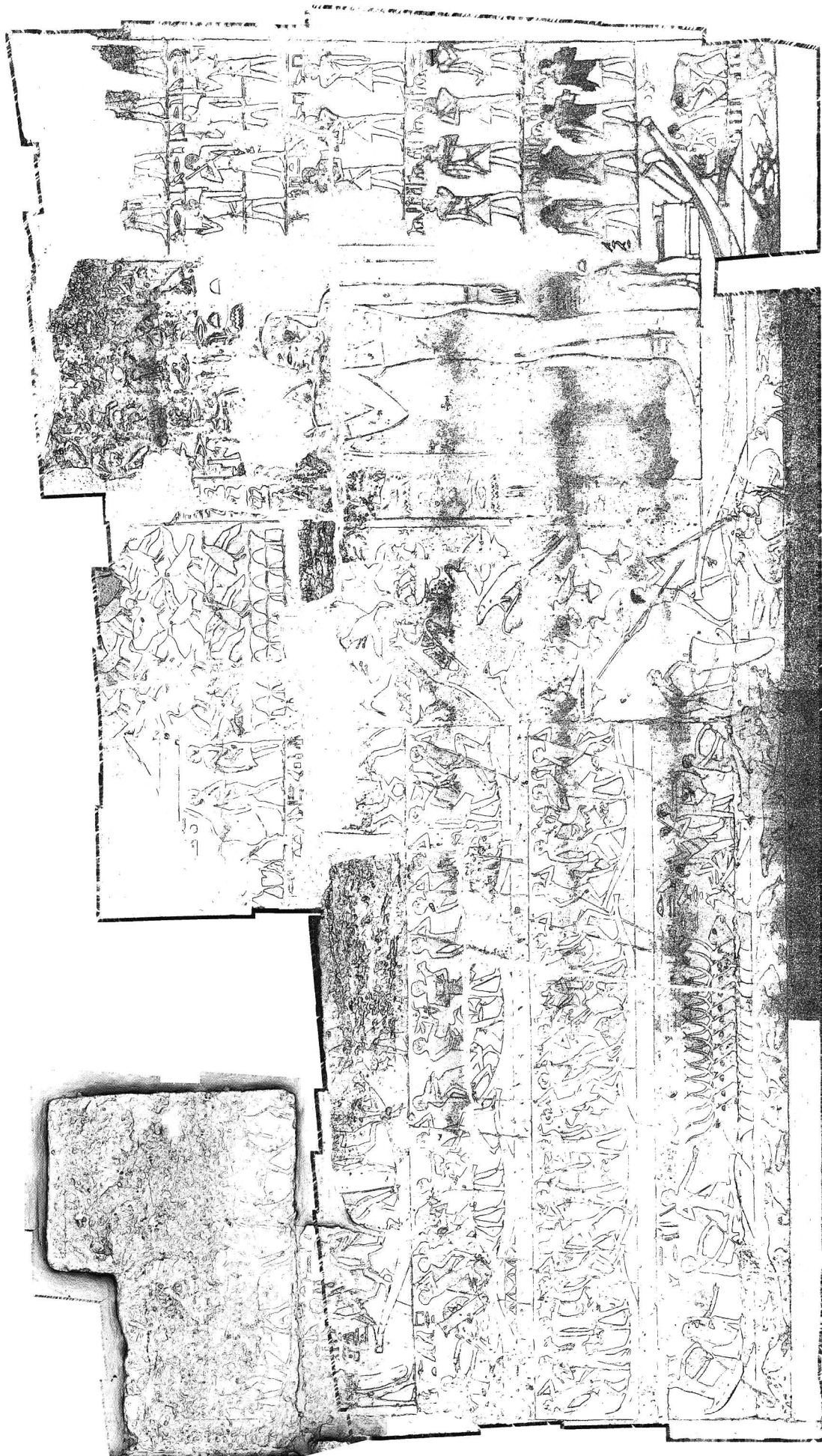


Fig. 2 イドウトのマスタバ第3室西壁のレリーフ
(2015年計測の三次元データより生成)



Fig. 3 イドゥートのマスタバ第3室西壁のレリーフ復元図
(格子模様部分はレリーフの剥落や亀裂による欠損、損傷が激しく判読が困難な箇所を表している。
筆者らの解釈に基づいて補った箇所を赤色、マスタバが再利用される以前に描かれていたイヒの像を青色でそれぞれ示した。)

2 イドウトのmastaba「第3室西壁」における壁画レリーフの復元

イドウト (*Idwt*) のmastabaは、ジェセル王の階段ピラミッドを囲む周壁の南側に並ぶmastabaのうちの一つで、ウニス王のピラミッド複合体の一部である。1927年にG. ファースによって発見されたのち、1935年にはR. マクラマッラーによる調査報告書が公刊された [Firth 1927; Macramallah 1935]。その70年後、カナワティ率いるオーストラリア隊が、ウニス王の共同墓地の調査報告の一環として、イドウトのmastabaにおける調査報告書を公刊した [Kanawati and Abder-Raziq 2003]。紀元前2360年ごろ、本来はイヒ (*Ihy*) という人物のために建造されたが、イドウトのmastabaとして再利用された経緯を持つ。このmastabaは、同時代の多くのmastaba墓と同様に、地上部分と地下の埋葬室の2つの構造物を持つ。mastabaの大きさは南北24m、東西13mであり、地上部分はレリーフを持つ5室を含む10室から構成される (Fig.1)。

被葬者であるイドウトは、第5王朝の最後の王であるウニス王 (在位：前2404-2374年³⁾) の娘とされ、テティ王 (在位：前2374-2354年) の治世の初期に死亡したと考えられる⁴⁾。本来の墓の所有者であったイヒは、ウニス王の治世に宰相を務めた人物である。mastabaがイドウトに再利用されるにあたってイヒの名前が削り取られた後、イドウトのものに置き換えられた。

イドウトのmastaba「第3室西壁」には、古王国時代の貴重なレリーフが現存する。このレリーフには、デルタの湿地帯から様々な鳥や魚、牛といった生物が墓の所有者であるイドウトにもたらされる場面が描かれており、この風景は古代エジプト人の思い描いた現世の楽園を鮮明に表現している。その一方で、このレリーフは、後述の解釈で注目するような生命の誕生と死を描写しており、古代エジプト人の捉える生命の豊かさと死の身近さを同時に示した特徴的なものである。このような場面は、古王国時代のmastaba内のレリーフにおいてしばしば見られるテーマのひとつであり、カナワティによれば、ジェドカーラー王治世の高官であるセネジェムイブ・インティの礼拝室に影響を受けているとのことである [Kanawati and Abder-Raziq 2003: 45]。

以下、Fig.2に示す3次元計測に基づくデータにより復元したレリーフ (Fig.3) をもとに、各場面に見られる描写や彫られた象形文字の翻訳・解釈を提示する⁵⁾。なお、象形文字の翻訳・解釈にあたってレリーフの文字を左から右へと表記した。赤色の部分は、筆者らの解釈に基づいて復元した箇所であることを示す。

レリーフの中央右側部分では、墓の主であるイドウトが舟の上に立ち、ロータスの花の匂いをかぎながら、その視線の先にあるデルタ地帯の風景を眺めている。彼女は、細身の衣装を身にまとい、手足に装飾品をつけ、髪を束ねて垂れ下げている。この姿は、若さを象徴している。

この部分は損傷が大きく、特に上部は確認できない箇所が多い。劣悪な状態の原因の一つには、この女性像の浮彫が浅く粗雑な造りであることが推察される。このmastabaは、本来イヒのために造られたものであったが、イドウトの急逝により、いくつかの変更を経て彼女のために使用されることとなった。イドウトのmastabaとして再利用されるにあたって変更された点は、彼女の像・名前・称号が主であり、イヒの名前や称号、血縁関係を持つ人物を示す文字や図像を削除した後に彫り直している。その一方で、その他の部分はイヒのレリーフを借用している。しかし、これらの変更は、イドウトの死後に短期間で行われたため、当初よりイヒのものであった部分に比べ、変更箇所はいずれも彫りが浅く、粗雑なものとなっている。そのため、現在も建造当初に彫られたイヒの図像の一部を視認でき (Fig.4)、

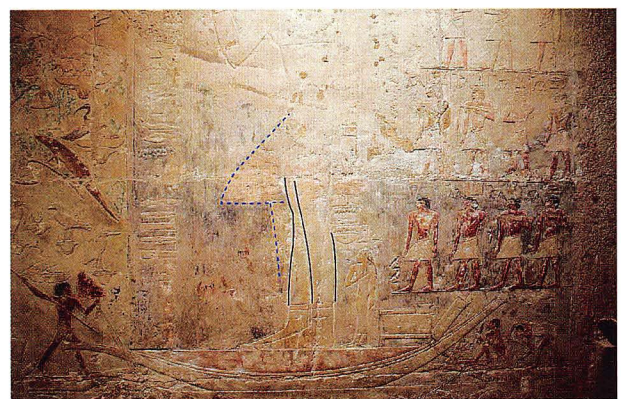


Fig. 4 イドウトとイヒの図像。青色の線はイヒの図像の輪郭 (腰布と足の部分)、黒色の線はイドウトの図像の輪郭 (足の部分) を示す。

3) ウニスとテティの在位期間については、以下にしたがう [Verner 2001, 590]。

4) カナワティは、イドウトがウニス王ではなくテティ王の娘であった可能性を示唆するボードやベッケラートらはウニス王の娘であると推測している [Kanawati and Abder-Raziq 2003: 37; Baud 1999: 564-565; Beckerath 1986, 846f.]。

5) 解釈の検討に関する詳細については、肥後他 2016を参照。

復元図 (Fig.3) には青色で示している。一方、イドゥートの像はこのレリーフの中で最も広範囲にわたる変更箇所であり、劣悪な保存状態にある一つの要因と考えられる。

彼女の後ろに位置する女性もまた新たに追加されたものであり、「乳母、ネベト」(*mn[t] Nbt*) と文字が刻まれている。乳母が側に立つことから、イドゥートが乳母を伴うほどの若さで死亡した可能性を示している。

イドゥートの右腕の前方と頭上には、それぞれ縦に並んだ象形文字が確認できる。右腕の前方に記された文章は、このレリーフ全体の主題を以下のように表している。

[*m33*⁶⁾] *phww zšw in z3[t] nswt nt ht.f rn.s 3 Zšzšt*
 湿地帯や沼地を王の肉体の娘によって[見ること]。
 彼女の偉大な名前はゼシェゼシエトである。

この文章は、このレリーフのテーマを端的に示している。このレリーフ全体は、デルタ地帯の湿地や沼地をゼシェゼシエト (イドゥート) が見ている様子を描いている。

ここで表現された名前、ゼシェゼシエトは、イドゥートの本名である。イドゥートという名前が後につけられた「良い名前」(*rn nfr*) であることに対して、ゼシェゼシエトは、正式な名前を表す「偉大な名前」(*rn 3*) として、このマスタバのレリーフの中にしばしば用いられている。また、「王の肉体の娘」(*z3t nswt nt ht.f*) は彼女が唯一持つ称号である。

イドゥートの頭上に並べられた一連の文字は、死者に対する贈り名である。左から順にそれぞれの列の解釈が可能である。

im3hw[t] hr Wsir/ im3hwt hr Inpw/
im3hwt [hr]⁷⁾ ntr 3/ im3hwt hr nswt/ Idwt
 オシリスのもとで尊崇されし者、アヌビスのもとで尊崇されし者、大いなる神のもとで尊崇されし者、王のもとで尊崇されし者、イドゥート。

ここでは、死者に対して広く用いられる称号である *im3hw* という表現がなされている。「尊崇されし者」(*im3hw*) として、死者は、オシリスやアヌビス

といった死後の世界や死者の葬祭を司る神々や王に尊崇されることで、来世での復活を期待していた。*im3hwt* の *t* は、女性語尾であるため、本来イヒのための贈り名であった *im3hw* の *w* の余白に *t* が新たに彫り加えられたことがわかる。一番左の列の *t* は完全に欠落しているが、この欠落が損傷によるものか、あるいは彫り忘れられたものかを確認することはできない。

イドゥートの足元には、向かい合った男性の削り取られた跡が確認できる (Fig.5)。意図的に削られた痕跡があることから、イヒに関するものであると考えられるが、保存状態が悪いため、イドゥートと向き合うように立っていることのみがわかる。この男性は、イヒの息子であると予想されるが、通常、被葬者の親族が足元や隣に並んで描かれる場合には被葬者と同じ方向を向いていることが多く、このように被葬者と向かい合って表現されるレリーフは少ない⁸⁾。

イドゥートの後ろには、様々な称号を持つ高官が彼女に続く形で並んでいる。これらの高官は、各段にそれぞれ3、4人の列をなしている。最上部については大きく欠落し確認できないが、以下4段の役人は、図像の上にヒエログリフで称号が記されているため、彼らの特徴を見ることができる。最下段の左端の役人の足元に描かれた文字 *mrmr* は、文字の配列、意味ともに、他の絵や文字から完全に独立し



Fig.5 イドゥートの足元に残る男性の図像の跡 (赤枠内: 2015年撮影)

6) テキストの上部は欠損し判読できない状態にあるが、この文章がレリーフのテーマを説明したものであることや、別室のレリーフ (Room VIII, IX, East Wall) に同様の表現が見られたことから、「見ること」(*m33*) を補足した [Kanawati and Abder-Raziq 2003 Pl. 62 and 71]。

7) レリーフには *h* の文字が彫られた痕跡がない。文字の間に余白がないことから、欠損による脱字ではなく、おそらく *hr* の誤記である。

8) 類似したレリーフには、ジャウのマスタバのものが挙げられる [Davies 1902, Pl. 5]。

ているため、解釈はできない⁹⁾。以下、上の段から順に解釈を行った。

imi-r sšrw/ imi-r sšrw/ imi-r sšrw/ imi-r sšrw
衣服の監督官 / 衣服の監督官 / 衣服の監督官 /
衣服の監督官

z3b smsw h3yt/ imi-ht z3 pr/ z3 pr
(宮廷の) 玄関の最年長の高官 / 地方の役人の下
級監督官 / 地方の役人

z3b šḥd zš/ z3b zš/ s3b zš/ z3b iri-md3t
書記の監督官の高官 / 書記の高官 / 書記の高官、
書物の保管者

hm k3 pr-ᜑ … / z3b šḥd zš/ z3b zš/ z3b iri-md3t
王宮の神官…、書記の監督官の高官、書記の高
官、書物の保管者

上から2段目は、いずれの役人も「衣服の監督官」と記されており、左から数えて1番目と3番目の役人は棒と箱、2番目の役人は棒とかご、4番目の役人は箱のみをそれぞれ運んでいる。記された役職との関係から、これらの役人が運んでいる箱には、衣類が入っていると考えられる。4段目の役人の図像と頭上の文字は、いずれも書記に関わる役職を示している。また、これらの役人の中にはパレット（4段目の左から数えて2番目の書記、5段目の3番目の書記）や、パピルスの巻物（4、5段目の右端の「書物の保管者」）といった書記の用具を携えた姿で描かれている者もある。

イドウトの後ろ側の小舟では、2人の男性が漁を行っている。前方の男性は、片足を伸ばして座った状態で、水の中に釣り針をつけた糸を垂らして魚を釣っている。そして、その逆の手には、棍棒を握っている。この描写から、捕まえた魚が暴れないように棍棒で叩きつけて、手前に置かれたかごの中に入れていく様子が見える。魚は、古代エジプトにおいても一般的な食材であった。後ろに位置するもう一方の男性は、大きな網を用いて魚を捕らえようとしている。彼の上にはヒエログリフが描かれており、この場面を文字で簡潔に説明している。

ḥwd

網を使って魚をとること。

イドウトの真下に位置するカバとワニの関係は、このレリーフの特徴的な描写であるといえる (Fig. 6) ここでは、水の中にカバとワニが並び、カバの子供の誕生が描かれると同時にその後方のワニが、カバの子供を食べようとしている。カバは、凶暴な動物として恐れられていたが、ワニはそのカバにとっての天敵であった。ここで表現されたカバとワニの関係は、このレリーフの随所で見られる自然界における生命の誕生と死を表した象徴的な描写といえる。

このレリーフのテーマである生命の豊かさと死の身近さを示す描写は、レリーフの中央部分にも見られる。この場面では、湿地帯の多彩な生き物の活動が描かれている。上方には、多数の鳥が飛び交う様子が描かれており、その下には雛鳥と親鳥が描かれている。2つの雛の巣があり、左側の巣の親は一羽で雛を守り、右側では、おそらくつがいの親が雛を守っている。しかしながら、巣の隣に位置するジェネット（ジャコウネコ科の動物）によって、既に雛の一羽は捕らえられている。この場面からも、このレリーフの随所で見られる生と死の併存を読み取ることができる。古代エジプト人は、湿地帯での生き物たちの営みに生命の豊かさを強く感じる一方で、それらの生や死を目にし、現世において死が身近な存在であること認識していたのであろう。

ジェネットの下方には、トキヤガチョウといったエジプトに生息する様々な種類の鳥類や、マングースが描かれている。下方に位置する鳥類の間には、蝶が描かれている。蝶は、湿地帯を特徴づけるものとして、しばしば他の動物とは不釣り合いな大きさとで描かれた。

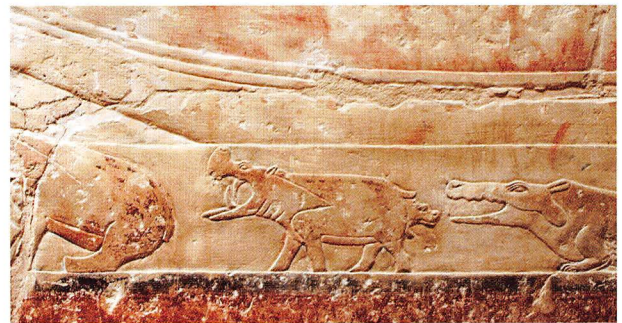


Fig. 6 カバとワニの図像 (2015年撮影)

9) 第3室西壁のレリーフは絵や文字の部分が浮き彫りになるように製作されているが、この文字のみ壁面を文字の形に彫り込んでいる。その点からも同時代のものではないことは明らかであり、より新しい時代に追加された可能性が指摘される [Kanawati and Abderraziq, 2003: 45]。



Fig.7 銛を構えてカバ狩りをする男性の図像 (2015年撮影)

イドウートが乗る舟に向かい合う2艘の小舟には、2人の男性が描かれている。前方の舟に立つ男性は、左手のロープでカバを捕らえ、右手の銛でそのカバを刺そうとしている。カバは、危険が迫った時に非常に獐猛な性格を見せること、その体が巨大で重量があること、農地に深刻な被害を与えるほどの暴食であることから、古代エジプト人に敵としてみなされていた。また、カバは、古代エジプト人の狩りの対象であり、カバを殺した人間は勇敢であると考えられていた。このような湿地帯におけるカバ狩りの描写は、古王国時代の墓のレリーフにしばしば見られる [Brovarski 2002; Fig.42; Wilson and Allen 1938: Pl. 38]。カバ狩りを含めた狩猟は、王家の力を誇示するための重要な行為であり、狩猟行為は王族の特権であった。そのため、このようなカバ狩りの描写では、カバを狩る男性は被葬者と血縁関係にある王族の場合が一般的である。

銛を構えた男性の右上部分には、イヒに関連する文字が彫られた痕跡があるものの、特定することはできない (Fig.7)。レリーフの精巧さから、この部分が本来はイヒのためのものであり、したがって、この男性がイヒに関係する人物であることは明らかであるが、名前や称号といった情報を削り取ることで、この男性を単なる一人の王族の男性として借用

したものと考えられる。その後方の舟の男性は、網を用いて魚を捕らえようとしている。

イドウートの視線の先にあるレリーフの左側は、6段に区切られた場面で構成されている。しかしながら、上段になるにつれ、損傷が大きくなり、特に最上段、およびその下の段はレリーフそのものが剥落しているため、不明な部分が多い¹⁰⁾。

最下段 (一段目) では、ナイル川に棲む様々な魚やワニの上を舟で進む牛飼いたちが描かれている。2艘の小舟の間に位置する牛たちは、前方の舟の船尾で仔牛を掴んでいる牛飼いによって誘導されている。これらの描写は、古代エジプト人とナイル川の周辺における多様な生き物との関係を生き生きと描写している。舟の上の牛飼いたちによる発言は、ヒエログリフで表現されており、前方の舟の牛飼いの発言は左から右へと以下のように記されている。

*nr pw ʿnh hr.k r šy pw nt hr mw iw.f m šp-tp ir(i)
tw r.f wrt*

おお、この牛飼いよ！

あなたの視界がこの水の上にいる沼地のものに対してあり続けますように。

それは、頭の隠れたものとして来るだろう。それに対して大きく気をつけよ！

10) カナワティは、最上段のわずかな解釈可能な部分から、この段には男性たちが小舟を動かす様子が描かれていると指摘する [Kanawati and Abder-Raziq, 2003, 47]。

この文章は、前方の舟で手を上げている牛飼いかから、後続の舟の先頭にいる牛飼いに向けられた発言である。「この水の上にいる沼地のもの」(šy pw nt hr mw) はワニの呼称であり、牛飼いは、水中のワニに対し注意を促している。人を襲うワニは、ナイル川や沼地に生息し、船乗りや漁師、湿地帯で働く者たちに恐れられていた。「頭の隠れたもの」(šp-tp) という表現は、ワニの頭が水の中に隠れて見えない状況を指す。

後続(左側)の舟の牛飼いの発言は以下の通りである。ここでは、文字を右から左の順に読むことができる。

i nr pw ʿk hr mw

おお、この牛飼いや！あなたの腕が水の上にあらんことを。

この発言は、後方の舟の牛飼いかから、前方の舟の船尾で仔牛を抱えている牛飼いに向けられた言葉である。「水の上にあらんことを」(ʿk hr mw) は、ワニの潜む川の中から水上に手を上げ、危険から逃れることを求める表現である。

先頭の舟に立つ水鳥を掴んでいる男性の右上部分には、おそらくその男性による発言が彫られていた。しかしながらこの文章は、本来の墓の所有者であるイヒのために向けられた発言であるため、意図的に削除されている。Fig. 8aの通り、目視での判読が難しい状態にあったが、カナワティらの解釈 [Kanawati and Abder-Raziq; p. 47, Pl. 54] および他の墓のレリーフ [Brovarski 2002: Fig. 53] を参考に

考察した結果、Fig. 8bのように復元案を提示し、文章を読み取ることができる。

iw nn n hri-tp nsw Thy

これは王の侍従、イヒのためのものである。

2段目および3段目には、男性たちが舟を漕いでいる様子が描かれている。下から3段目の左側には、この場面を説明するヒエログリフが描かれており、以下のように読むことができる。

pri m mht

デルタ地方の湿地帯から出ていくこと。

この表現から、ここでは、舟に乗った男性たちがデルタ地帯から戻ってくる様子が描かれていることがわかる。舟を漕いでいない男性たちはそれぞれ、デルタ地帯で狩猟した小動物や鳥を手にしてている。舟の上には、かごに詰められた生きた鳥や魚、ロータスの花が描かれており、この場面は、彼らが大きな収穫を得てイドゥートのもとに戻ってきた様子を描いている。

下から4段目は、大部分の欠損により内容を正確に読み取るのは困難であるが、左側の欠損の少ない箇所から、舟を製作する場面であることがわかる。左半分では、男性が舟を紐状のもので引っ張っている様子がうかがえる。また、部分的に残っている箇所から確認できる象形文字は、この場面の内容や会話を示している。以下、この段に見受けられる象形文字の解釈を右側から順に行った。

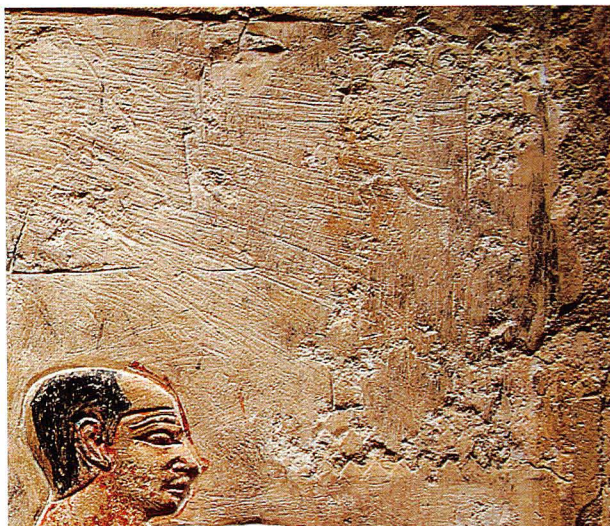


Fig. 8a レリーフ最下段の右端 (2015年撮影)

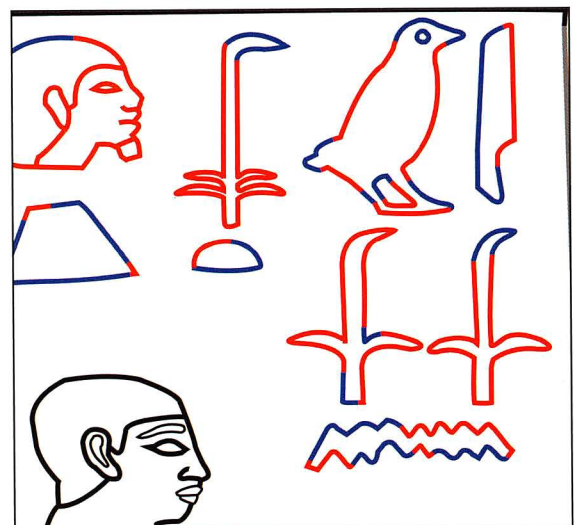


Fig. 8b レリーフ最下段の右端 (復元案)

mhyt rnpwt pw

これは、新鮮なパピルスである。

iw sꜥ [i]

(私は) 引っ張る。

… *in* … *t šsw*

ロープの……によって……。

ir (i).i r hꜣwt.k … im swt iw n [i] tn

私はあなたの望みに対して…行う。

…これを(私に)持ってきて¹¹⁾

4段目の右上にある文章は、欠損部分が少ないため、文意を読み取ることができる。右端に見られる「これは、新鮮なパピルスである」(*mhyt rnpwt pw*)という表現は、舟を作る際、その材料として新鮮なパピルスを用いたことを指している。古代エジプトではパピルス草は、記述道具だけでなく、舟の材料としても用いられた。左側の「(私は) 引っ張る」(*iw sꜥ [i]*)という表現は、文章の下のロープを掴んでいる男性と併せて考えれば、舟を作っている作業の様子を表現したものと考えられる。

左端の上部は、部分的に欠落しており、正確に解釈するのは難しい。2つの文章のうち右側部分にある、「ロープの……によって……」(*…in…t šsw*)は、その下のロープを用いて舟を固定している男性の描写を踏まえて考察すると、ロープによって舟を固定しているという表現であると考えられる。なお、これら2つ文章の間に、カナワティが復元を行っていない文字*s*の文字が確認された。文字の向きから、左側の文章(*ir (i).i r hꜣwt.k … im swt iw n [i] tn*)の一部と考えられるが、文章の区切りを示す棒状の記号も確認できるため、独立した文章であると考えられる。しかしながら、いずれの表現に関しても、欠損による文字の脱落が多いため、正確な解釈は難しい。

5段目も同様に、大きく損傷しているため、詳細な解釈はできないが、現存している右側部分はその内容の一部を示している。そこでは、牛にくくりつけたロープを男性が握っている。牛の上部には象形文字がわずかに残っているものの、意味を読み取ることにはできない。

3. おわりに

本節では、イドゥートの歴史的・文化的価値を再評価する研究の一つとして、地上部分のレリーフの解釈・復元を行った。特に本研究では、復元にあたって、過去の調査報告書や同時代資料と併せて3次元計測に基づくデータを活用することで、レリーフの精密な復元に成功した。

本節で解釈、復元を行った「第3室西壁」のレリーフは、古代エジプト人が思い描く現世の楽園を主題としたものであり、そこには、デルタの湿地帯の生き物と人間の多種多様な活動が鮮明に描かれていた。一方で、カバとワニの場面に見られるような、生と死の描写がこのレリーフの随所に見られた。このような描写は、古代エジプト人の認識していた生と死の身近さを反映しているものである。レリーフに彫られたヒエログリフの解釈については、各文章の内容を吟味し、先行研究を精察することで、蓋然性の高い復元と解釈を示した。本稿で試みたような3次元計測データに基づくレリーフの緻密な復元・解釈は、これまでの研究でなされなかった複合的な研究であり、既に異分野の研究にも活用されている[本報告書1-9]。

幸いにしてイドゥートのマスタバは、既に二度にわたって詳細な調査報告書が公刊されている。その一方で、サッカラには、依然として細やかな記録や資料研究が行われていないまま現在も風化や人的被害の危機にさらされている遺跡も多い[肥後2017]。このような状況において、本節で報告した三次元測量のデータを用いたレリーフの記録作成および復元案の提示は、今後のエジプト文化遺産の恒久的なドキュメンテーションに貢献しうる有効な手法になると期待される。

謝辞

本研究の復元データの作成にあたり、青木彩香氏(関西大学大学院 文学研究科博士課程前期課程2015年修了)と松下亮介氏(関西大学大学院理工学研究科博士課程前期課程2016年修了)に多大なご協力をいただきました。ここに深く感謝申し上げます。

11) 後半部の *im swt iw n [i] tn* については、カナワティの解釈にしたがった。*tn* は本来、女性形の指示形容詞であるが、文章を見る限りでは、ここでは明らかに指示代名詞として使用されている。このような指示形容詞が指示代名詞として使用される例は稀である。マクラマッラーはこの文章の解釈を行っていない [Kanawati and Abder-Raziq 2003: 47; Macramallah 1935, 17]。

参考文献

- Baud, M. *Famille royale et pouvoir sous l'Ancien Empire égyptien*, Vol. 2, Cairo, 1999.
- Brovarski, B. 2002: *Giza Mastabas Volume 7: The Senedjemib Complex, Part 1*, Boston.
- Davies, N. 1902, *The Rock Tombs of Deir el Gebrâwi, Part 2*, London.
- Firth, C. M. 1927. "Excavation of the Service des Antiquités at Saqqara (November 1926-April 1927)," *Annales du Service des Antiquités de l'Égypte* 27, 105-111.
- Kanawati, N. and M. Abder-Raziq 2003, *The Unis Cemetery at Saqqara*, Vol. 2, Oxford.
- Macramallah, R. 1935, *Le Mastaba d' Idout*, Cairo.
- Simpson, W. K., 1980, *Mastabas of the Western Cemetery, Part 1*, Vol. 4, Boston.
- Verner, M. 2001 "Old Kingdom: An Overview," in Redford, D. B. (ed.) *The Oxford Encyclopedia of Ancient Egypt*, Vol. 2, Oxford, 2001, pp. 585-591.
- Wilson, J. A. and T. G. Allen 1938, *The Mastaba of Mereruka, Part 1*, Chicago.
- von Beckerath, J., "Unas," in He lck W. and E. Otto (eds.) 1986. *Lexikon der Ägyptologie*, Vol. 6 Wiesbaden, pp. 845-847.
- 吹田真里子、吹田浩 2013 「エジプト、サッカラのイドウトの埋葬室の「供物リスト」復元の試み」、『セマウイ・メヌ（関西大学文化財修復研究拠点紀要）』第4巻、131-142。
- 杉亜希子 2005 「イドウトのマスタバ墓埋葬室の供物リストについて」、『オリエント』第48巻（1）、88-116。
- 肥後時尚、青木彩香、松下亮介、安室喜弘、吹田浩 2016 「イドウトのマスタバ『第3室西壁』における三次元計測データを用いた復元と再解釈」、『Journal of the Center for Global Study of Cultural Heritage and Culture（関西大学国際文化財・文化研究センター紀要）』第3巻、9-22。
- 肥後時尚 2017 「サッカラ、ウニスの共同墓地における私人墓調査の現状-ケヌウのマスタバ墓を事例に-」『Journal of the Center for Global Study of Cultural Heritage and Culture（関西大学国際文化財・文化研究センター紀要）』第4巻、269-282。